寝床屋の無料配布

・ウワバミ……3

「じゃあ、今日はこれ」
女は背負子から下ろして並べて見せた本を見ながら、吉三の説明を一通り聞く。その上でじっくりと見比べて一冊を慎重に選び出した。
「へェ、毎度」
年老いた貸本屋は、銭を受け取り本を手渡す。
「楽しみ」
受け取った本を胸に抱き、こちらを見て女は、うふふ、と少女のように微笑んだ。
その眼差しにビリッと痛みが体を貫き走ったような気がして、覚えず震えた。この女、妖術でも使うのであろうか。
落とした眉に鉄漿をつけた歯。紅を挿した口がにいっと上に上がる。少し丸みを帯びた肩口。年増と呼ばれる年齢の女だ。とは言え、老いていると言うほどの歳ではない。なんとも言えない色気があるのは認める。ジジィのハズの己ですら、花に誘われる

蝶か蠅のようにフラフラと釣り出されてしまいそうだ。
だが、その色気と同時に、ゾワゾワと怖気が身体中を這い回る。妖術でなければ、この女はウワバミが化けた妖怪じゃなかろうか。吉三は途端に恐ろしくなった。
「……また参りやしょう」
吉三はワタワタと広げた本と返してもらった本を背負子へ括り、背負った。
「ええ、またお願いします」
女は妙に意味ありげな眼差しを寄越してそう言い、貸本屋を見送った。
貸本屋は今にも体ににゅるりと巻き付かれ、紅をつけた真っ赤な口がぽっかりと黒く穴を覗かせて、頭からぱくりと丸呑みされるのではないかとビクビクしながら、会釈をするとそそくさと一軒家の勝手口を出た。
「ふぅん。ちょいと色っぽい話が出て来やがったじゃねぇか」
長年の友、十兵衛がチビリと熱燗を舐めながらそう言う。吉三が仕事終わりにちょいと世間話をしに立ち寄ったのだ。十兵衛は同心の目明しである。女房が小間物屋を営んで、付け届けだけでは到底足らない某かを補っている。店の奥の小さな座敷で、

有明行灯の暗い灯りの元、老齢に深く踏み行った男だけでしみじみと話をするのが、二人の楽しみでもあった。
「止せやい。こんなジジィに色っぽいもねぇだろう」
まぁ、嘘である。かの年増がずっとチラチラ意味ありげに見てくるのは、なんとなく判っていたのだ。
「なぁに、ジジィだからって枯れる必要もねぇわナ」
炙ったあたりめをアチチと割いて齧りながら、十兵衛が揶揄う。
「よせやい」
枯れた、か。吉三はそう言われる歳か、と改めて思いながら、茶碗酒を一口呑む。
嫁は一度貰った。そこそこ長く過ごしたが、流行病で呆気なくいなくなってしまった。貸本屋だというのに、普段はまるっきり無口な自分に良く付き合ってくれた。良く働く嫁だった。世帯を持つなんてまるで考えたこともない己に、降って沸いた縁談で、驚いて呆気に取られている間に金屏風の前に座っていたくらいだ。
贅沢もできない貧乏暮らしなのに、いつも楽しそうに笑っていて、滅多に感情を表さない自分をぐいぐいと引っ張って連れ回すくらい元気だった。

だからか、吉三の隣に来て、いなくなってしまうまで、あっという間だったように感じる。
それ以来、なんだか嫁に申し訳ない気がして、惚れたも腫れたも避けてきた。
だが。
今この歳になって、妖術に引っかかってみたいような気持ちになっている。こう思うこと自体が、もうあの妖術使いの思惑なのではないだろうか。思惑通り引っかかったならどうなる？　ペロリと頭から飲み込まれるのだろうか？　それとも、魂だけ抜かれて惚けてしまうのだろうか。
「ま、丸呑みされるなら、覚悟の上でな」
十兵衛は、吉三の考えを見抜いたように、ニヤリと笑った。
「吉三さんは物知りだねェ」
うふふ、と笑いながら、吉三の猪口に酒を注ぐ。
「そ、そうでもねェ……でさァ……」
吉三は酌を受けながらも、緊張で手が震えるのを止められなかった。

とある夜、吉三は件の年増の家に上がり込んでいた。
本を返してもらい、新しい本を貸したところで「もっと話が聞きたい」と言う女の、見え透いたような、そうでないような誘いについ頷いてしまったのだ。
仕事を終えた夕暮れ時。背負子もそのままに勝手口から声をかけると、夕食の支度をする年老いた女が出て来て、ジロリと吉三を胡散臭そうな物を見るように睨め付けてきた。迂闊に動けば手に持った出刃包丁で骨ごと切り落とされそうで、恐怖を覚えた吉三は、女の誘いなぞに乗らず、まっすぐ帰れば良かったと後悔するも、訪いを入れてしまった手前今更踵を返すことも出来ず疲れた足で精一杯踏ん張るしか出来なかった。
「いつサン、その方は良いのよ」
そう言って、吉三を招いた女が助け舟を出してくれて、心底ホッとした。
夕方だけ通ってくると言う下女のいつに、酒肴の用意を言いつけて、女が吉三を座敷へ招きあげる。そして、吉三を上座へ座らせると、改めて、はまと名乗った。
「以後ご別懇のほどを」
三つ指をついて頭を下げてから、はまはちょっと上目遣いでいたずらっぽく見てく

る。その目つきに、全身がぬるりと捉えられてしまうような気がして、ぞくりと震えが走った。絡めとられるのを己は喜んでいるのか、恐ろしいと思っているのか。

逡巡していると下女が燗酒と肴、手塩皿を運んで来て、手際よくささやかな酒宴の用意が整う。

そして断る暇もなく、あれよあれよという間に盃のやり取りが進んでしまった。

更に盃におはまの酌で酒を受けたところで、吉三はふとあることに思い至る。

のこのこと上がり込んでしまったが、実のところおはまには旦那がいるのではないのか？

元々芸者とも、どこぞの廓の遊女だったと言う噂もある。おまけにここは長屋ではなく、小さいとはいえ庭付きの一軒家だ。余程の事情がなければ、普通は女が一軒家なぞ購うことなど無理なご時世である。どこぞのお大尽やらお武家様に落籍（ひか）されて囲われていると考えるのが妥当だろう。

であればである。吉三は主がいない間に上がり込んだ不逞の輩と言うことになるではないか。

そんな女に酌をさせて酔うどころか、罷り間違ったりすれば、どんな目に遭うか知

れない。
おはまは己がしていることを判っているのだろうか？　いや、もしや。判っているどころか、わざと過ちを犯そうとしているのだとしたら……。
「さ、どうぞ」
しなだれ掛かってきそうな勢いでおはまが銚子を差し出してくる。勢いに断り切れず、つい盃を空けて酒を受けてしまう。
「わたしも」
おはまが上目遣いに空の盃を手に持つ。吉三は請われるまま酒を注いでやった。が、手が震え出して酒がおはまの手に掛かってしまった。
「す、すまねェ……」
吉三が膝立ちになり慌てて手拭いを出すより早く、おはまがウフフ、と笑って手に掛かった酒を舐めとった。仕上げにペロリと唇を舐める仕草が艶めかしくて、耳元で時の鐘よりも大きな音がごうんごうんと響いた。己が狼狽えているのは判ったが、これが酒の飲みすぎなのか、今にもこの女の主が帰ってきて咎められるのが心配なのか、女の色香に迷ってしまいそうなのか、よく判らない。

「ねぇ、もっと」
おはまがくいっと盃を呷って、差し出してくる。
「呑みすぎじゃァ……」
「久しぶりにお酒が美味しくて」
嬉しい、とにっこり笑う顔は途端に可愛らしくなる。艶やかな顔と可愛らしい顔、どちらが本当のおはまなのだろうか。
「いつサァン、お酒。お酒がないわよぅ」
気がつけば、おはまが襖を開けて、空の銚子を振りながら台所に声を掛けていた。
「随分とお召しで」
暫く経って銚子を運んできたいつが、無表情の中にも驚きを混ぜて、おはまの手から空いた銚子を取る。
「うふふ、楽しくて」
「へぇ、左様で」
胡散臭そうな顔で吉三をチラリと見やって、いつはおはまの言葉に納得していない様子で言う。そんな目で見られても、吉三が何かをしたわけではない。ただ、請われ

て昨今の本の話や、貸し本屋の生業について話したくらいだ。
その間、おはまは吉三に酌をしてくれていたが、それ以上に手酌で酒を注いでは、かぱかぱ盃を干していたのである。
吉三も酌を返していたが、おはまの呑み干す速度の方が早くて手を出せなくなった。むしろ、手を出す隙すらなかった。ついでに酌をしている所を下女や主に見られようものなら、何と因縁をつけられるか怖かったと言うのもある。そこで、おはまの好きなようにさせたのだ。
「っはー！　楽しいわぁ」
クスクスと楽しそうに笑いながら、おはまは相変わらず手酌で酒を呑み続けている。
いつは盛大なため息をこれみよがしにこぼして座敷から下がっていった。
「それで？　吉三さん。そのお客様はなんの本をお借りになったの？」
呂律も怪しく、にゃんのほんをおはりににゃったの、と聞こえたが、恐らく言いたかったのはこうだろう。おはまはすっかり吉三にしなだれ掛かって、いや、もう自分を支える壁が柱かつっかえ棒のように倒れかかっている。
こんなところに旦那と出会しでもしたらと思うと、酒を呑んでも酔う気がしない。

いや、もう呑んではならない。
「え、ええと。水滸伝をお貸ししやした」
「唐土のお話でしたかしら」
もろほしのおはにゃしになっているし、実はその話はもう三回繰り返しているのだが。盃を空けるたびにその前のことを忘れてしまうらしい。
気づけばおはまの周りには銚子が林立していた。どれほど呑んでいるのかわからないくらいだ。
「いつさァン！　お酒ぇ～」
それでも酒を頼むのは忘れないらしい。と言うか、眠くならないのだろうか。いや、相当呑んでいるはずだ。呑み過ぎて具合が悪くなったりしないのだろうか。
その内、うふふ、と言う笑いに変な節が付き始めて、拍子を取る頭がぐらぐらと揺れ始める。
「あ、あの……」
名前を呼ぶのも、大丈夫かと体に触れるのすら躊躇われる。もちろん、こんなところを旦那に見られでもしたら、と思うと体を精一杯に縮めるくらいしかできない。

「あはぁ、呑んじゃった」
そんなことを思っていたら、ふふふ、とおはまは笑ってパタリと吉三の膝に倒れ込んだ。吉三は、声にならない悲鳴を上げる。
こんなところを見られたら、何を言われるか判らない。いや、重ねて四つに斬られるかもしれない。それだけは御免だ。妖しげな女の色香に迷ってみても良いかと思っていたのは本当だ。だが、修羅場まで経験したいなど微塵も思っていない。
膝の重みと、すっかり寝入ってしまったおはまの寝息に、指一本たりとも動かすことが出来なかった。居心地が悪くて正座していた膝から下の感覚がない。こんな誤解を招くようなところを見られでもしたら、と言う恐怖と焦りで、おはまには早く起きてほしいのに、起こすために手を触れることすら躊躇ってしまう。
拝むから、早く起きてくれ……！
吉三は念仏さながらに何遍も唱えた。
「あれ、まぁ」
鶏がけたたましく時を告げた頃。座敷の様子を見に来たいつが、昨晩とは打って変

わって笑いを堪えながら一言呟いた。
丸呑みされても良い、なんて不埒なことを思った罰なのかもしれない。そんなことを思いながら、吉三はようよう重みが外れた膝をゆっくりと伸ばす。最初はなにも感じなかった足の先から、じわんじわんと痺れが伝わって来て、いっそ痛い程だ。その痛みを堪えながら、いやその痛みをしみじみと噛み締める。
何事もなくてよかった、と。
「相済みませんがね、手を貸しちゃァくれませんかねぇ」
呑んだくれてすっかり寝込んでいるおはまの手を持って、いつがふうふう、と息を吐きながら、吉三を恨めしそうに見やる。
「あ……、ああ。済まねェがもうちっと待ってくンねェ」
吉三はそう言って足を指す。
「オヤオヤ。ずっとお内儀様を膝に乗せていたのかェ？　そりゃご苦労様なことで」
いつが老女とも思えぬほどに、あっははは、と大笑いした。その笑い声が耳を打ったのか、おはまがううーん、と何事かを呟いて足だけ寝返りを打った。裾が乱れて、白い脛が剥き出しになる。何とかと言う仙人が血迷って神通力を失ってしまったとい

うそれも、今の吉三には恐ろしい罠に思えて仕方がない。
「いや……、その……。この家の主……と言うか、その、お、内儀さんの……なんと言うか……、その……」
ずばりと聞くのも躊躇われて、視線を逸らしながらもごもごと言えば、下女はもう一度、あっははは、と大口を開けて笑った。
「男が居ねぇのかってことなら、居やしませんよ。この蟒蛇具合がね」
いつのその言葉で、色々事情があるのだと納得してしまった。むしろ、妄想かも知れないあれやこれやの切ない事情まで思い浮かべてしまった。
「足が落ち着いたなら、手を貸しておくんなさいヨ」
いつが呆れたように吉三に声を掛ける。
吉三は、躊躇いがちに女の脇の下を持つと、座敷に敷かれた布団へおはまを運んでいく。
「じ、じゃぁ、あっしはこれで……。その……、馳走になりました」
吉三は背負子を手に、まだ少しふらつく足取りで座敷を出る。その吉三を、おはまに上掛けをかけながらいつがもの言いたげな顔で見てくる。

おはまの事情は察した。いつの言いたいことも判る気がする。
だが。
怖いもの見たさで誘惑に引っかかってやろうなんて気持ちで来てはならない所だったのだ。
「また、読み終わった頃に……」
辛うじてそれだけを言うと、吉三は勝手口へ向かった。

「……あれはダメですね」
「うーん、ダメか……」
吉三を見送ったいつの言葉に、だらけたように伸びをしたおはまが、ごろりと横向きになると肘枕をしてちっ、と舌打ちをした。
「優しそうだし、良いと思ったんだけどねェ。膝に寝転んだ時なんざ、お地蔵さまみてェに固まっちまって、可愛らしいったら」
くすくす、と思い出し笑いをするおはまを他所に、いつは座敷の猪口を片付け始める。

「あーあ、折角水で我慢したのに」
「でも、結局呑むんでしょう？」
いつの言葉に、おはまが口を尖らせる。
「呑んじゃァいけないのかェ？」
「いけなかァありませんがね。限度ってェもんがあるでしょうよ」
いつに言われて、おはまが更に口を尖らせる。
「お酒好きなんだもの」
そう。芸者だったおはまは何人もの旦那を迎えたが、酒が好きすぎて、呑みすぎて捨てられたのだ。挙句、下女の給金どころか酒を満足に買う金にすら困る始末。最初はそんな困っているおはまの色香に、色々な金貸しが言い寄ってきたが、おはまの醜態を見るにつけ、囲うどころか。金を貸すことすら渋られている。
芸者の旬も、腕も喉も落ちた。家のことは出来ないから、いつが居なくなっては困る。だが、どうやって働いたらいいか、それも判らない。
「落ちる相手も、落ちやしませんよ」
「はぁい」

おはまはぶうたれて答えた。が。

「次行くか。浜町の表店に、良い感じの爺さまが居るのよ。小さい古道具屋でね……」

逞しいと言えば聞こえは良いのだが。主の切り替えの早さにいつは小さく溜め息を吐いた。

――了

エアブー 20230212

寝床屋の無料配布

2023/02/17 刊
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

貸本屋のおじさま（？）を狙う、謎の女性のお話しです。
貸本屋さんも調べて行くと奥が深いと言うか、所謂本屋（書肆屋）とも深い関係があってと言う事が判ったので、この辺りでもちょっと話を考えて行ければなぁ、と思っています。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

＊おねがいとおことわり＊

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

・有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。

・本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。